



香散見草

咲く丘で



キャラクターイラスト

ミトコンドリア

悠川 はるかわ

白水 はくすい

タブレットマギウス

香散見草の咲く丘で

悠^は川^る
川^か
川^わ

白^は水^く
水^す
水^い

目次

3 2 1

敢えて言うならあとがきっぽい

キャラクターイラスト
ミトコンドリア

「今日レタス高っ」

柚那^{ゆな}は、山積みさされているレタスの棚に貼り付けてある値札タグを見て、思わずそう漏らした。

3 藤で編んだシツクなデザインの買い物かごには、鶏肉やらトマトやら食パンやらが詰め込まれて顔を覗かせているが、今日は珍しく、買い物かごの常連食材がその仲間入りを果たすことはなかった。

「仕方ないか……レタスは新鮮なのがおいしーのにね」

柚那^{ゆな}は口をへの字にしながら、バッグからハンデタイプタブレット端末を取り出しつつ、お店の出口へと向かう。

「家計簿っ」と

画面に《家計簿》と書かれたアイコンをなぞりながら、家計簿の電子魔術書を発動させると、画面からにゅるっと這い出るように淡い光が伸び、買い物カゴを包み込んだ。

タブレットの画面には、買い物かごの中に入れた商品が、次々と余すことなく価格や生産情報とともに書き出されてゆく。

「ちょっと買い過ぎちゃったわね。まあいいか、次の仕事入ってるし。家計簿閉じて」

画面に決済終了の文字とともに合計金額が映し出されると、柚那ゆなはタブレット画面を触りながら家計簿を閉じて店を出た。

ボブシヨートの艶やかな髪に、化粧なしでもそれなりに整った顔立ち。背は平均的ながらスラリとした歩き姿は、吊し売りのシャツに長袖シャツを腰に巻きジーンズを穿いた、清潔感はあるがごく目立たない、普通の成人女性だった。

しかし、この今やほとんどの主婦が用いているという、決済機能つき自動家計簿電子魔術書を、単機能の家計簿 e P U G を組み直して作り上げたのが、他ならぬ柚那本人だったりする。

電子書籍化した魔法の書をタブレットに組み込み、タブレット内の S I M チップを介して、宙に浮遊するナノマシン・M A N A を力の源に各種の不思議な力を発動させることができる、電書魔術こと電子魔術書 e P U G が普及したこの世界で、そのアレンジ改造をするのが柚那の生業だった。

食料品マーケットから柚那の自宅アパートまでは、歩いて十五分とかからない。大通りを抜けると、一気に人通りが少なくなる路地へと入ってゆく。

路地に入り、やや歩みを早める柚那。比較的新しめのアパートやマンションが並ぶ、閑静な下町と言えば聞こえはいいが、ひっ

たくりから夕チの悪い珍走団ちんそうだん、さらには痴漢まで徘徊はいかいしている、大部分が軽犯罪とはいえ、お世辞にも治安がいい地区とは言えないのだ。

ぶおおんっ、ぶおおんっ……

「きゃあっ、あ、カバンが……！」

6 　そして柚那ゆなの見ている前で、今日もまた起きる常習犯によるひったくり。ただの原付ならいいのだが、ライディングが巧みで逃げ足が早いため始末が悪い。

「そんなにサーキットで走るお金に困ってるのかしら」

常習ひったくり犯がこっちに正面向かって現行犯でやってくる好機など、そうそうない。柚那ゆなは買い物かごをアスファルトの地面に置くと、正面から猛スピードで逃げてくるスクーターにタブレットを取り出して向き直る。

柚那^{ゆな}はタブレットを操り、画面に青白く発光する魔法陣が出現したのを確認すると、左手に持ったタブレットをスクーターに突き出すように向けた。

「GO！」

ぎいっ！

「うわっ」

7 タブレットから微妙な空気の歪みが発生したかと思うと、スクーターに乗っていたひったくり犯は、思わず右手に持つひったくりた女物の赤いカバンを放り捨て、ハンドルから左手も離して、ヘルメットの上から両耳を塞ぐような仕草をするが……二輪車の上でバランスを崩したのは致命的だった。

一気にバランスを崩したスクーターは、そのまま派手に横転し、勢いで滑りながら大通りの歩道まで転がり出る。

柚那ゆなの後ろの大通りから、ガードレールにぶつかったと思しきドガシヤンとド派手な金属音が聞こえてきた。

「……私、しーらないっ」と

柚那ゆなは買い物かごを拾い上げ、近くに落ちていた赤いカバンも拾い上げて、へたりこんで呆然としている女性の方へと歩を進める。ともあれ、近所迷惑がまたひとつ滅びたのはいいことだ。

8 「はい、貴女あなたのでしょう？ どうぞ。

……あ、くれぐれも犯人は自分で操作を誤って転倒したことで、警察にもし聞かれたら口裏合わせよろしく」

柚那ゆなが使ったのは、タブレットの前にある二メートル四方にのみ聞こえるよう指向された、一四〇デシベルの精神不快音を一瞬だけ発する、護身用の音圧弾おんあつだん。たとえヘルメットを被ろうが耳栓をしていようが関係ないほどの大音量で、聞いた者の動きを少し

の間だけ封じ込め、その隙に逃げたりするのが本来の使い方である。

大昔にあった護身用防犯ブザーなるものの攻撃機能強化版として、今や市販の電書魔術用タブレット全機種にプリインストールされているePUGだが、柚那ゆなが持つのは、聞こえる範囲が五メートル四方で音量も一九〇デシベルまで強化された、違法改造仕様の強化音圧弾なのは、彼女だけが知る秘密だった。

「あ、ありがとうございます……助かりました」

まだ十代後半であろうか、柚那ゆなよりも明らかに年下と分かる女性というより少女は、立ち上がるとカバンを受け取り、深々と頭を下げた。

「いえいえ、気になさなくて結構よ」

「本日は急用で急いでおりますので、後日改めてお礼にお伺いさ

せていただきます。よろしければ、ご連絡先を」

「そうですか、それならありがたく……っと、では名刺はこちらです」

柚那はごそごそとポケットから名刺入れを取り出し、『元電魔局勤務 風美草柚那 ePUGのカスタマイズお値打ちに承ります☆』と、連絡先ともどもファンシーなフォントで書かれた、商魂たくましく、まじりそうな笑顔の顔写真入りの名刺を手渡した。

「納品完了っ」と

柚那は、残り少ないコーヒーの入ったマグカップを傾けながら、右手でキーボードのエンターキーを押した。

送信完了の画面表示を確認してから席を離れると、今度は食事テーブルの上に置かれていたタブレットを操りにかかる。

「電魔局、開発部の内線一番へ」

柚那の声とともに、タブレットから筒状に光が伸び、男性の顔が浮かび上がった。ビジュアルフォン ePUG である。

「どうもです、柚那元次長」

「前の肩書きは余計よ。それより送ったわ。届いているかしら、現開発室次長どの？」

11

皮肉たっぷりでのたまう柚那だが、ホログラフィに映る男性はどこ吹く風といった様子だった。

「はい、無事に。今確認させています。すいません、お世話かけちゃって……あ、残りの代金は私の個人口座からさっき振り込みましたので」

「ま、同期からの頼みだからね……確かに振り込まれてるわ。しっかりかし、嘘を言う手を持ったグラスの氷の色が白くなる仕

掛けを施す e P U G なんて、そんなの開発部の機材でこっそりと作ればいいじゃない。どうせ合コンとか疾やましいデートで使うんでしょ？」

柚那ゆなは、見事なほどの呆れ顔とジト目を披露しながら頬杖を突く。

「いやあ、この前合コンで捕まえた女にすっかり騙されちゃったもんで、再発防止用ってやつです」

「ざまあないわね。ちょっとは女遊びを控えなさいっていう神のお告げよ」

「いやいや、開発部のモテない独身貴族部たるもの、このぐらじやめげませんよ……っと、別の外線入ってるみたいなんで、この辺で」

そそくさとした表情の同期のホログラフィは、フェードアウト

するようにフツツと消えた。

「ヘンタイ。新婚の分際で何が独身貴族なんだか。そろそろ奥さんにチクった方がいいところかしらねえ」

柚那は呆れ声を上げながら、改めて口座の金額を確認する。相場よりもそこそこ多めに振り込まれているのは、間違いなく自分の新妻への口止め料込みに相違そういなかった。

「ま、あちらのご家庭の問題はあちらで解決してもらいましょう」
ePUGカスタマイズの仕事は、最安値案件でも一本で三ヶ月程度なら衣食住費に困ることはないのが相場だが、それほど案件が多いわけでもなければ、開発期間から日割りすると、依頼料が莫大というわけでもない。いい金づるを手放すのも気が引けた柚那ゆなは、そっと電子通帳ePUGを閉じると、手際よく着替えて外へと出た。

「今日もよく晴れてるわ」

自宅から歩いて三十分ほど。途中にあるファーストフード店でサンドイッチとドリンクを買うと、柚那ゆなは小高い丘のある公園へとやってきた。

香散見草かざみぐさの古い巨木が一本そびえ立つ丘の頂上からは、街の様子をよく見渡すことができた。柚那ゆなが住む住宅街とは対照的に、丘の下には高級住宅街が広がっている。ただの家ではなく、敷地が広い華族の豪邸もちらほら。

そして、街の奥には晩秋で雪化粧が始まった、見事な山々の姿が見える。昔に比べて温暖化が進んだ昨今、平野の都市部でコートやダウンジャケットとなるものが絶滅してからしばらく経つが、高山部はまだ昔のような寒さが残っているのだ。

「いただきます」

柚那にとって、自分の名字と同じ読みの香散見草の樹がある絶景の丘は、こだわりのある大のお気に入りだった。依頼がひとつ無事に終わると、この丘でランチを食べるのが柚那の自分へのご褒美のようなものだ。

「あら、貴女様はもしや」

背中から声をかけられ、慌てて口の中のサンドイッチを飲み下す柚那。

振り向くと、先だってひったくり犯から助けた少女が立っていた。

「あら、こんなところで出会うなんて偶然ね」

「はい、ここから見える景色は好きなので。風美草さんですか？」

「まあ、ね。たまにしか来ないけど。貴女、この辺に住んでるの？」
柚那は食べ終えたサンドイッチの袋を片付けながら言う。

「電車で数駅離れていますので、近くとは言えませんが、あるお屋敷に住み込みで働かせていただいています。この丘は好きなので、用事の帰りに寄り道するのが好きで……」

「そうなのね。細かな仕草の独特の上品さから、そうかなとは想像してたけど」

「まあ、よくお分かりですね、ほんの少しのやりとりでしたのに」
少女は目を丸くして柚那を見つめる。

「私も若い時に、とある華族の家で住み込みやってね。貴女の歳まで続かなかったけど」

柚那は少し物寂しそうな顔をしたかと思ったのも一瞬、いつもの笑顔で香散見草の樹の下にあるベンチから立ち上がった。

「お邪魔したわね。私はこれで」

右手をひらひらと振りながら、足早に丘を降りる階段へと姿が

消えてゆく柚那ゆなに、少女は見送るような視線を送っていた。

こんこんっ

「ん？ 誰かしら。宅配便の予定はないはずだけど」

テレビで朝の情報番組をぼんやり見ていた柚那ゆなは、タブレットから鳴る遠隔インターフォンの音に、ゆっくりとソファから立ち上がった。インターフォンの音が重厚な木扉のノッカー音に改造されていたのは、完全に柚那ゆなの趣味である。

「トビラノメっと」

柚那ゆなは遠隔インターフォン兼戸締まり管理のePUGを発動させると、タブレットの画面にドアの前の様子が画面に映し出される。そこにはちよつと予想外のお客が立っていた。

「あら、本当に来てくれたのね。お入りなさいな」

柚那は軽く指を鳴らすと、アパートの部屋の鍵がカチャリと開いた。

「突然お邪魔して申し訳ありません」

「いいのよ、ちょうど暇だったし。座ってちょうだい」

包み紙をした箱を小脇に抱えた、つい昨日香散見草の丘で再会した少女を、リビング横の応接室に通す柚那。アパートの間取りは、広めのリビングダイニングと仕事部屋兼寝室、そしてこの物置兼応接室といたってシンプルだ。

「コーヒーちょうど切らしていてね。紅茶しかないけど、よければどうぞ」

柚那はキッチンから手際よく紅茶を淹れてくると、白を基調としたシンプルなテーブルに二人分を優雅な仕草で並べてから、少女の向かいに着席する。

「ありがとうございます。あとこちらのお菓子は、先日のお礼です」

「あら、わざわざ気を遣わなくても。でも、せっかく持って来ていただいたし、ありがたく頂戴しておくわね」

少女は小脇に抱えていた菓子折小箱をテーブルの上に差し出すと、柚那はにっこりしながら受け取った。

「それと、今日は風美草さんにご依頼したいことがあってお伺いしました」

「おや、ひょっとしてePUGカスタマイズのお話かしら？」

柚那は、自分で淹れた紅茶を口に運びながら少女に問う。

「はい、私の仕える家の主人から仰せつかりました。ちよっと難しい案件になるそうで、なかなか受け手がなかったのですが、もしやと思います」

「へえ、まあ私の機材と腕で手に負える範囲のカスタマイズなら。あ、殺傷型 e P U G の改造や、違法改造は受けないのは他の業者さんと同じだからね」

少女に釘を刺す柚那ゆな。犯罪への転用を防ぐため、非殺傷型から殺傷型 e P U G へのカスタマイズや、違法になる、あるいは明らかかな違法行為に利用するのが明白なカスタマイズは、警察や電魔局にバレると、かなりの厳罰に処せられる。

少々のことなら、電魔局の元職員という肩書きとコネを使って揉み消しも出来るのだが、度が過ぎるとそれにも限度がある。さすがの柚那ゆなも、違法改造の外注を受けるような危ない橋を渡るような真似はしていなかった。

「カスタマイズというより、ほぼ新規に e P U G を組んでいただくことになりそうなので……」

少女は、遠慮がちなながらも意を決したように話し始めた。

「私の家の主人が、『シンデレラのように、一瞬で女性が素敵にドレスアップできるePUGを作って欲しい』とおっしゃっているのです」

くびっ

口に運ぼうとしていた紅茶を噴き出すのを、辛うじて柚那はこらえる。

「な……なかなか夢見がち乙女みたいなこと言うご主人様ね、あなたの家……」

柚那は、動揺を隠そうともせず何とか言葉を絞り出す。

予想の右斜め上を飛び越えられたというか、半端な違法改造よりよっぽどイチャってるような内容の案件だった。

「うーん、いちおう早着替え用ePUGとかをベースにやれば、

やれないことはないのかももしれないけど……でも、時間とお金はかなりいたただくことになるわよ」

「それには、心配には及びません」

言いながら少女は、柚那ゆなの座るテーブル隅に置かれた菓子折小箱に視線をちらちらとやる。

「この菓子折がどうかしたの？　どれどれ」

柚那ゆなは、菓子折の包装紙を剥がして箱を開けたが、そこには個包装された焼き菓子が敷き詰められているのみ。

「おお、これは私が子どもの頃から好物だった、レッドブーツのクッキーアソート」

柚那ゆなは嬉々とした表情で、有名菓子店のオリジナル高級焼き菓子を見る。知る人ぞ知る老舗有名店だが、華族御用達の贈答用クッキーアソートは、一般販売がされていないことでも知られ、世

間では幻の一品とまで呼ばれるシロモノだ。

しかしいかにも高級クッキーとはいえず、ePUGカスタマイズの依頼料としては論外なのだが。

「……なんだか箱、えらく重いわね」

柚那ゆなは不審そうな顔をすると、箱からおもむろにクッキーを取り出す。

「まあ、今時こんな細工が好きなんて、なかなか変わったご依頼主ね」

二重底の下から出てきたのは、びっしりと敷き詰められた政府発行の記念金貨だった。枚数はざっと数えても五〇枚はある。この種類の金貨は銀行で現金に換金可能だが、丸一年は少々派手に生活しても困らない程度の額にはなると思われた。

「あ、おう、お気に召しませんでしたか？」

いささか心配そうに聞く少女だが、まるで昔の時代劇に出てくるような演出に、柚那ゆなは思わず苦笑する。

「ふふ、お代官様も悪よのお」

「……風見草屋、それはお互い様じやろう」

『ほーっほっほっほっ！』

柚那ゆなの冗談を見事に返した少女は、お互いに作り高笑いをハモらせる。

「……ま、冗談はさておき。私が昔お仕えしていた家の御曹司様も、何かにつけて凝った演出が大好きでね。ちよっと懐かしいよ
うな気分になっただけよ」

冷静に我に返ると、思わずやや投げやりな口調で答える柚那ゆな。
まるで世捨て人を思わせるその仕草と表情に、少女は柚那ゆなの触れ
てはならない怖い一面を一瞬見たような気がした。

「いいわ、金額も十分だし引き受けさせていたたくわ……そうい
えば、あなた貴女、お名前は？」

「まいか苺香、しきのまいか式野苺香と申します。こちらが連絡先となりますので、
ご依頼についてのこと一切は、私の方にご連絡お願いします」
まいか苺香と名乗った少女は、連絡先が書かれた手書きのポストカ
ードを差し出した。

「うーん、思ったより難しいわねこれ」

依頼を受けてから二ヶ月。

柚那^{ゆな}は作業用コンピュータの前で、渋い声を上げながらホットココアを桜色の唇に持っていく。飲み慣れた味のホットココアまで、いつもよりビターっぽく感じる。

歌手や舞台俳優が使う、早着替え e P U G をベースにして作ることにしたのだが、通常の早着替え e P U G は、着ている衣装を脱衣してから、あらかじめ用意された衣装を装着させていく方式。現物がありもしない衣装を用意して着替えさせるのは、簡単ではなさそうだ。

「どうしたのかしらねー……うん、こういう時はさっさと寝る

が一番。また明日」

もうすぐ日付が変わる時刻になっていた。柚那ゆなはうーんと背伸びをすると、バスルームに向かい沸かしてあったお風呂に入る。

風呂上がりにレモン水を飲み、桃色ストライプのパジャマに着替えてベッドに直行する柚那ゆな。いつも寝付きは早いほうだったが、今日はePUGのことで悩みがあるからか、なかなか睡魔は襲ってこなかった。

「素敵な衣装、ねえ……」

外は季節外れの夕立なのか、大きな雨粒が無機質な街並みをしたたかに打ちつけている。単調なリズムを刻むその音を聞きながら、仰向けになっている柚那ゆなは、いつの間にか昔のことを思い出していた。

「わあ、何て綺麗で素敵なお装なのでしょーう」

紫と紅をベースにした派手な和風柄カラードレスを見て、柚那は目を輝かせていた。

「ただの和風柄じゃなくて、織り込みとか、この国のあらゆる伝統工芸の技法の粋を結集して作ったのだから……完成に一年以上かかったらしいから、気が遠くなるような話だよ」

柚那の隣を歩く男性は、感心半分、呆れ半分といった様子で話す。歳は柚那と同じ十六歳ぐらいだろうか。上等なドレスシャツにストラックスを身につけたその姿は、少し線が細めだが、骨格がしっかりしている。短めの髪に意志の強そうな瞳が、心地よい印象を与えるいい男だった。

皇族関係のパーティーに呼ばれたその会場で、二人が見たのは有名デザイナーが作ったらしき、とても華やかな和柄のカラード

レスだった。実際に着るものではなく、いわゆるコレクション品らしいが、実際に着用するにしても、あまりにも豪華すぎる仕様で着用シーンも限られるので、実用性には乏しいだろう。

乳児院からこの和気宮家に拾われ、使用人として育てられながら仕えて十五年。十六歳になったばかりの柚那は、和気宮家の長男こと吾妻にとって、同じ年で誰よりも信頼できる側近といえた。

「柚那はこんな派手なもの着たいの？ 重そうだし暑そうだし、いいことなさそうなのに」

吾妻は完全に呆れた様子で、動きやすさ重視のピシツとしたスリツ姿の柚那に聞く。その佇まいはまるで小さな秘書そのものだ。

「はい、素敵なおドレスを纏うのは、多くの女性の憧れなのは必然です。可愛い正義とも申します。吾妻様、余所の女性の方には、無神経な発言は慎まれますように」

柚那は静かな表情となり、吾妻に少し語気強く注意する。

「そうか、無神経な内容だったか。それは悪かった柚那」

「私には謝らなくとも結構です」

「いや、僕にとっては柚那にこそ謝らなくてはいけない」

吾妻は柚那の腹部に組まれた手を握り、カラードレスの方に視線をやる。

「いつか、着せてあげるから。約束するよ」

「……わたし、ただの使用人ですから」

柚那はうつむきながら、弱く消え入りそうな声で答えた。

あのようなカラードレスを着るような機会といえば、ひとつしかないのだから。

——私の幸せの絶頂って、二十六年生きてきたけど、今思えば

あの日だったわね。

激しさを増す雨音を聞きながら、柚那にまだ睡魔は襲ってこない。

パーティーの翌日の夜のこと。

「旦那様、お呼びでございましょうか」

柚那は夜遅くに呼び鈴で、和氣宮家の主人、つまり吾妻の父親に呼ばれた。

ほぼ吾妻専属の使用人のようになっていた柚那だが、和氣宮家の使用人である以上、普通に家全般のことをきちんに行うのも彼女の大切な役目なので、呼ばれることは毎日普通にあるのだが、こうも夜遅くというのは珍しかった。

既に入浴済みだった柚那だが、白い女性用ワイシャツに緩めの

紺色のスラックスという、屋敷内で指定されている平服をきちんと着てきている。

「柚那ゆな。まあ、こちらに来なさい」

「はい」

すると、吾妻あづまの父親は傍らのタブレットを手にすると、何かしらの電書魔術を使ったようだった。柚那ゆなには何を使ったのは見えなかったが、いずれにせよ今日は様子がおかしい……柚那ゆなが眉をひそめた刹那。

「!？」

突然、柚那ゆなは関節の力が抜けて床に崩れ落ち、尻餅をつきながらも一瞬両腕で体を支えようとしたが、すぐに脱力して仰向けに倒れ込んでしまった。

正確には、両肩と股関節の四つの球関節に力が入らなかった。

教育は通信で受けており、とりわけ電書魔術とくにe P U G分野
 でずば抜けた才能があった柚那は、これが警察や軍の憲兵が使う、
 捕縛用の電書魔術であることはすぐに理解できた。

「だ、旦那様、何をなさるのですか……」

柚那は震える声で吾妻あづまの父親を見上げるが、その凶人めいた様
 子を見て柚那は恐怖を覚える。そこにいるのは華族の主人ではな
 く、ただの何かに取り憑かれた獣にしか映らなかつたのだ。

「柚那ゆな あ、ここまで美しいカオで姿形のいい、旨そうな女になる
 とは……赤子の頃から手塩にかけて栽培した甲斐があつたものよ。
 さあ、収穫してやるからなあ」

「さ、栽培って……」

住み込みで育てられた召使である以上、つまりは和氣宮家わけみやの
 所有物同然であることは柚那も頭では理解しているが、育てたで

はなく栽培した、という柚那ゆなの人間としての尊厳を全否定するそのひと言に、柚那ゆなは大きな衝撃を受けた。

関節の力が入らず何の抵抗も出来ない柚那ゆなに、獣から逃れる術はもはやなかった。

「いやあ……もうやめてえ……」

悪夢の記憶から我に返ったとき、柚那ゆなは背中を丸めた姿勢で枕を強く抱いて、体中が汗でびっしょりとなっていた。

街を打ち付けていた雨音は、少しずつ弱まっている。柚那ゆなは大きな溜息をつくと、ベッドから起き上がり汗を拭いて、乾いたパジャマに着替えようと思ったが、しかし悪夢の破片のせいか、パジャマを脱いで裸になることが怖くて仕方がなかった。

柚那ゆなは体が自然に乾くのをベッドの上で待ちながら、眠れぬ一

晩を過ごした。

「珍しい来客だな」

初老の男性は、本が散乱しているテーブルとソファを軽く片付けながら、柚那ゆなを手招きする。

「先生の研究室、相変わらずですね。モノ散らかりすぎです」

35

「研究者とはそういうものなのさ」

教え子の言葉を、意に介する様子もない初老の男性。柚那ゆなの母校でもある電魔局付属大学校の手狭な教官用研究室は、古書や学術論文でびっしりと占有されていた。

「去年電魔局は退官したと聞いたが、まああれか、いわゆる寿退官かね」

「いいえ、色々ありまして、自分で今はePUGカスタマイズ職

をやっています」

柚那と初老の男性は、ソファに向かいになって腰掛けると、お互い缶コーヒーのプルタップを開けながら答える。初老の男性と柚那の学生時代の指導教官は、昔からこの缶コーヒーを愛飲していた。

「そうかそうか、自立したか。まあ風見草君の生活ができてい
なら、それはそれでいいことだ」

教官は缶コーヒーをひと口飲む。

「それで。この年の瀬に、缶コーヒーを奢りに遠路はるばる会い
に来たわけではあるまい」

「もちろんですわ。先生、実は、『シンデレラのように、一瞬で女
性が素敵にドレスアップできるePUGを作って欲しい』という
案件に出くわしちゃいまして、それで技術面のご相談に……」

そう。

柚那は e P U G の組み方に困った挙げ句、和氣宮家を飛び出してから逃げ込むように入学した、電魔局付属大学時代の指導教官を訪ねたのだった。

依頼の内容を聞いた教官は、実におもしろそうに声を上げて笑う。

37

「こりゃまた、なかなか珍奇な e P U G の依頼を受けたな」

「そりゃ笑うに値するシロモノですが、実際作る方としては笑いごとではありませんわ先生」

柚那は缶コーヒーを一気にあおる。

「然り。召喚系 e P U G の流用ではなく、物質を無から構成するならその難易度は極めて高いな……どれどれ」

教官は落ち着いていた雰囲気ゆなで柚那の愚痴に答えると、ソファを立

ち上がり奥から数枚のコピー紙を手にして戻ってきた。何やら白黒で古文書がプリントアウトされているようだった。

「つい先日、欧州で十八世紀中頃のものに見られる、非常に興味深い手記の一部が見つかったな」

言いながら教官は、そのプリントアウトされたコピー文書をテーブルの上になべていく。

「ある侯爵家の手記のようなものだろう、と推定されておる。火災に遭ったらしく伝存したのはごく一部らしいのだが……その頃は当然ながら、電書魔術のデの字も存在しない時代だ……気づいたかね、風美草君」

五枚のコピー紙を並べ終わると、再び教官は余裕の表情で、ゆったりとソファに座り柚那ゆなに問いかける。

柚那ゆなはじっとコピー紙を見ることコンマ一秒。

「先生、私ラテン語読めません。英語とイスパニア語はできますけど」

「……」

一瞬の気まずい沈黙は、ほんの数秒だったか。

「そ、そうか……まあ風美草君は、飛び級するほど優秀な教え子ではあったが、ラテン語は履修科目にないから、さもありなんか」

教官は気を取り直すと、三たび缶コーヒーをそっとひと口。

「不思議なことに、この侯爵家手記に書かれているのは、解読したところ ePUG のプログラミング言語の一部ではないかという推論が、先日欧州の学術論文で発表された。この時代に何でこのようなものが……というのがちよっとした話題になった」

「ミステリーやオーパーツの都市伝説としては興味深いですが……」

柚那^{ゆな}は名前も知らないコウシヤク家の書いた、読めもしないラテン語の怪文書を眺めながら、気のない様子を見せる。

「肝心なのはここからでな。」

この侯爵家手記の内容、私も研究してePUG用の言語にしてみたのだが、取り込んだ物質をコピー生成し、ePUG内にひとつだけ封じ込めることができる、ということができそうなのだよ。

40 まだ実験はしてないがね」

「それって……」

柚那^{ゆな}は顔を上げて、恩師の表情を見やる。

「うむ。そのシンデレラのような素敵なおドレスの実物は、別途必要なのだろうが、それを取り込んでePUGの中に封じ込めることができれば」

「あとは、それを召喚できるように構成すれば……」

柚那ゆなの言葉に、教官は穏やかな表情で頷く。

「あとで翻訳したものはメールで送ろう。」

まあ、頑張りなさい。その電書魔術を必要とする者がいる限りは、それに応えるのが我々技術者の矜持なのだから」



「もしもし、式野^{しきの}さん？」

教官と会ってさらに二ヶ月後。

柚那^{ゆな}は、リビングで依頼主の使用人こと苺香へ、ビジュアルフオンを繋いでいた。

42

「ご無沙汰していますわ、風美草さん」

白い女性用ワイシャツに黒いスラックスという、よくある華族の使用人の平服に身を包んだ苺香は、穏やかな表情で優雅に会釈をする。

しかし、その格好の苺香を見る柚那^{ゆな}の内心は、あまり穏やかではない。苺香に罪はないのだが。

「ご依頼ただいでいたePUGだけど、ようやく完成したわ」

「まあ」

ビジネスライクな柚那ゆなの冷ややかな声に、苺香は嬉しそうに顔をほころばせる。

「ePUGの名前は《アプリコット》としたわ」

「アプリコット、ですか？」

「ええ。今回のePUGを作るに当たって、その基礎を築いたいにしえの侯爵家に敬意を表して、ね」

教官から解析結果とともに送られてきた、侯爵家手記の翻訳の最後の単語は、「アプリコット」で途切れていた。本当はその先があったのか、あるいは書きかけで絶命したのか。その侯爵家が記した最後の単語から、柚那ゆなは名前を取ったのである。

「それで、このePUGはオンライン回線経由でインストールができない特殊構造になってしまったから、アプリコットを直接プ

リインストールした、SIMチップ入り新品端末ごと納品させて
いただくわ」

柚那ゆなは、市販品ながら傑作機として知られる小型タブレットを
右手に持ち、苺香へ見せる。

「わかりました。問題はないと思います。

それで、納品の期日と場所なんですが……こちらから指定させ
ていただいてもよろしいですか？」

苺香が指示した場所は、柚那ゆなにはかなり意外なところだった。

夜風から、刃物のような鋭い寒さはすっかり和らいだが、心地
よい、といえる程度のひんやり感はまだ感じる季節。

世間の酒好き様がひとしきり呑み終わって、終電に乗り帰路に
ついた頃であろうこの時間になると、柚那ゆなの住んでいる街はすっ

かり人通りもまばらになる。柚那はいつも慣れた道を、冬から春へと変わりゆく季節の空気を感じながら、ゆったりと歩いていた。「まさか、香散見草の丘をアプリコットの納品場所に指定するなんてね」

柚那の緯線の先には、濃いピンク色の花を盛大に咲かせている、あの大きな香散見草の樹が見えた。

香散見草の丘は、近所では有名なデートスポットらしいが、さすがにこの刻限ではカップルの姿もない。時間的にも、いわゆるお楽しみタイム真っ盛りの時間だろう。

——そういえば、アプリコットも香散見草も、バラ科サクラ属の親近種だったわね。

ふとそんなことを思い、柚那は自然と静かに笑った。

風が運ぶ、濃厚な芳しい甘い香りを感じながら、柚那は丘の頂

上へと続く階段を登ってゆく。そして、柚那は階段を上りきり、見慣れたその頂上へと到達した。

見慣れた香散見草の丘で、いつもと違うのは、その巨木の側にひとりの人影があることだった。

上等なドレスシャツにスラックス身につけ、少し線は細めだが、骨格がしっかりしたその姿……たとえ十年の時が過ぎても、そのかつて見慣れた後ろ姿を柚那が見間違えることはない。

「吾妻様？」

納品には苺香ではなく、代わりの者が香散見草の丘に向かうとは聞いていたが、あまりにも予想外の人物に、柚那は半信半疑の様子で誰何する。

「探した。十年」

静かな……静かなひと言とともに振り向いた男性は、十分に大

人の姿へと成長した、かつて柚那が仕えた和氣宮家の長男、和氣宮吾妻だった。

「なんで、吾妻様が……？」

「苺香君は和氣宮家の、今の当主たる私の使用人だから……彼女が持ち帰った柚那の名刺を見て、目を疑うと同時に、ほっとしたというか、何より生きていてくれたことが……」

吾妻は感情を抑え、言葉を選びながらも詰まらせながら、柚那の誰何に応えてゆく。

とりあえず、吾妻がここにいる理由は分かったが。

「吾妻様、このアプリコットは、吾妻様が？」

柚那は、小さな手提げアルミケースからタブレットを取り出す。

「ああ。どうしても、この電書魔術を贈りたい相手がいるから。

無理を言ったね」

吾妻は柚那に歩み寄ると、アプリコットのみがインストールされたタブレットを受け取る。そして、すぐに電源を入れてタブレットを起動させた。

「柚那、使い方は？」

「はい、ドレスは種類のみしか入っていません。発動のさせ方は、一般的なePUGと同じですが、この電書魔術の性質上、最上級MANA大量消費型ePUGよりも、さらに三倍のMANAを一気に使用しますので、発動できる環境は限られると思います」

電書魔術を発動させるには、空中浮遊させているMANAと呼ばれる物質を一種のエネルギーとして消費するのだが、そこまで来ると、一ブロック当たりのMANAを全て一瞬消費してしまうような量とっていい。そのため柚那が用意したのは民間用SI Mチップではなく、電魔局経由で横流ししてもらった高性能の軍

用SIMチップ。それも性能限界ぎりぎりまで引き出す勘定だった。

人為的に、MANAの濃度を高くした空間を作って発動させない限り、自然環境下ではうまくアプリコットは発動しないと思われた。

「そうなのか……しかし、この香散見草の丘は、気流の流れの影響かMANAの濃度が地上よりもかなり濃い。発動させるには問題ないと思う」

「えっ……？」

吾妻あづまの言葉に、柚那は一瞬驚いた声を上げた瞬間、吾妻あづまはタブレットを操り、アプリコットを発動させた。

タブレットの画面には、香散見草かざみぐさの花の色に輝く魔方陣が描かれ、伸びた光の粒子は柚那ゆなを強く包み込む。

香散見草の丘が、数秒にわたり光り輝いたその後には。

紫と紅をベースにした派手な和風柄カラードレスを身に纏い、
呆然と今起きた事態が呑み込めないままの柚那がいた。

そう。

柚那が選んだ、シンデレラのような素敵なおドレスの実物は、十
六歳のあの日に吾妻と見て纏いたいと望んだ、あのととても華やか
な和柄のカラードレスだった。

今は、ある皇室系の施設の奥で非公開展示になっているらしい、
という所まで突き止めた柚那は、こっそり施設に忍び込んでカラ
ードレスを侯爵家の遺した電書魔術を使い取り込んだのだが、そ
んな立派な不法侵入行為は秘密である。

「え……？」

柚那は両手を交互に見て、さらに自分の姿を見渡しながら、自

ら作った電書魔術を、白らの身にかけられた事態を把握する。

「柚那。私の側にすっと、永遠にいてくれないだろうか」

香散見草かざみぐさの咲く丘で、芳しい恋を思わす香りに包まれながら、その香散見草かざみぐさにも劣らぬ華やかに咲いた一輪の花に、男は十年の時を越えた思いの丈を口にした。

「でも、私、私……あのお屋敷に戻るのは……」

「大丈夫。もう柚那を傷つける者は和氣宮家わけみやにはいない」

吾妻あづまは、柚那を優しく抱き寄せる。

「いつか今この瞬間が来ることを信じて、柚那を傷つけた者を此の世から消すという、私もひとつの人には言えない罪を背負ったから」

強く、先ほどよりも冷たさがある春風が吹き、香散見草かざみぐさの枝と花は、優しく揺れて音を立てる。

「汚れた手の私でも、柚那は私と添い遂げてくれるだろうか？」
吾妻は、柚那の瞳を見つめながら再度問う。

「汚れた体の私でも、吾妻様は私を伴侶にと望まれるのならば」
柚那は、吾妻をまっすぐ見上げながら、心の奥に十年間囚われていたその想いを解き放った。

香散見草の丘の頂上で、ひと組の男女が強く抱き合う姿は、誰の目にも止まることはなかった。

「それにしても、吾妻様」

香散見草の樹の下にあるベンチに並んで座る柚那は、うっとり
ふわふわとした心持ちに身を任せながら、隣に座る吾妻に問いか
けた。

「私にプロポーズするためだけに、わざわざ私にアプリコットを

作らせたんですか？」

いじわる、と最後に小さく言いながら、柚那は吾妻の太ももに「の」の字を人差し指で書く。

「私は凝った演出が好きなんだ。柚那も知ってるだろう？」

吾妻はいけしゃあしゃあと言い放つ。

「なんてね。柚那はePUGとか電書魔術について、あまり言い感情を持っていないと思ったんだ」

「電書魔術の総本山たる電魔局にもかつて勤めて、ePUGカスタマイズの仕事をしている私が、ですか？」

柚那は可笑しそうに笑いながら、穏やかに答える。

しかし、「の」の字を書く柚那の指の力は、自然と強くなっているのに吾妻は気づいていた。

「吾妻様には敵いませんわ。そう、私は電書魔術が憎たらしい」

柚那からうっとりとした声色は消えていた。

確かに和気宮家を出てから、自分の生きる道を切り開いてくれたのは電書魔術ではあった。

しかし同時に、柚那の女としての清浄と幸せを断ち、吾妻とを未来を引き裂いたのもまた電書魔術の力だったのだから。

捕縛用の電書魔術をかけられたときのあの恐怖は、いまだに柚那から消えてはいない。

「だから、柚那に自分の力で、電書魔術で、自分の幸せへの扉を再び開いて欲しかったから」

吾妻は、ePUGの力でシンデレラのごとく変身した柚那の肩を抱き寄せる。

「いま、柚那は幸せ？」

柚那は、かつて夢見たドレスに身を包んだ自分自身を見渡して

から、吾妻あづまに上半身をゆっくりと預けた。

「ええ。だって吾妻様あづまと再び一緒になれたのですもの」

移りゆく長い時を見つめてきた香散見草かざみぐさの樹は、愛する二人を包むように優しく見つめているようだった。

（香散見草の咲く丘で 完）

敢えて言うならあとがきっぽい

初めての方ははじめまして、そうでない方はご無沙汰しております。野菜が高騰すると、鍋が気軽に食べられなくなるので勘弁して欲しい季節、いかがお過ごしでしょうか？

今回は、二〇一六年下半期の新作、シェアワールド《タブレット
56 トマギウス》参加作品『香散見草の咲く丘で』をお送りします。

香散見草というのは、いわゆる梅の古称のことですね。品種にもよりますが、桜よりも濃いピンク色が印象的なあれです。干したりリキュールに漬けたりすると、旨いものに変わる実を付けるアレですね。いかん書いてる側から梅酒飲みたくなってくる（笑）

タブレット・マギウス（以下、タブマギ）のお話を頂戴した際、他の作家さんはたぶんバトルものを書くだろうなーと思い、敢え

てバトル描写は極力削除したものにしよう、ということに。

まあ、バトル物が本質的にタブマギの醍醐味というか狙いなのかもかもしれません。白水さんはあまのじゃく同人作家ですからね。今回は、純粹な恋愛小説にチャレンジしてみようということになりました。未熟な部分はあるかと思いますが、楽しんでいただければ幸いです。

57

なお、未成年の日の柚那の修羅場シーンは、全年齡対象作品ということとで全面カットにさせていたいただきました。そっちの方を期待していた諸兄には申し訳なくオモッテイルので、そのうちこっそり書こうかなという気もしています。柚那のイラストを描いて下さった、ミトコンドリア様には深くお礼申し上げます。

二〇一六年十二月三十日

悠川 白水

タブレットマジウス

香散見草の咲く丘で

(電子書籍版)

はるかわ はくすい
悠川 白水

平成 28 年 10 月 23 日 紙本初版発行
平成 28 年 12 月 30 日 新装版発行
平成 29 年 1 月 10 日 電子版発行

著者・発行人 悠川 白水
キャラクターイラスト ミトコンドリア
発行サークル・電子化 白水の小説棚

著者 Twitter : @haruhaku

著者公式ブログ : <http://haru-haku.jugem.jp/>

タブレットマジウス公式 : <http://tabmagi.net/>

※ この作品はフィクションです。実在の人物や団体・兵器と実際の出来事などとは一切関係がありません。

©2017 Hokusui Harukawa (illust Mitochondria) All Right Reserved